

極樂通信

UBUD

vol. 14

Gokuraku Tsushin Ubud vol.14 / publication of Kage no Syuppankai / Printed in Bali / 1996



U・B・U・D I・N・D・A・H



photo:E. Sugawara

ここは、ついさっきまで道と空き地だった。バリではスコールの後、よくこんな風景に出くわす。「ごめんごめん、出先で雨に降られちゃって…。」とは、言い訳の基本形だが、電話やFAXが無かった頃のウブドでは、じゅうぶんこれで成立した。雨は、すっぽかしたい約束やさほりたい仕事の救世主だった。私は、のんびりと雨宿りするバリの時間が大好きだ。

ところが、日本に帰ってくると、学生までが携帯電話やポケベルを持ち歩いている。どんどん言い訳がしにくくなるのに…。

ウブドもだんだん便利になって少しづつ言い訳が出来なくなってきた。果たして文明の力は、本当に私達を豊かにしているのか…。

菅原恵利子

Contents

● Kabar Baru Berita Lama トランプ詐欺／UBUDで被害者！	4
● バリの舞踏 Nandir	5
● Lancong Lancong Bali/1 ランチョン ランチョン バリ／1	6
● Belajar Tari & Gamelan -11- バリと私の赤い糸	9
● Enak・Enak・Ubud / 9 全公開！ラワールのすべて	10
● Culture Shock オダラン初体験	13
● UBUD よろず百科 野焼き	14
● Bagaimana Caranya? [5] 民族芸能カセットの選び方	16
● BUKU-BUKU 紹介 バリ島楽園紀行	19

● Dari Jepang バダからの便り	20
● TOKO BEST 店 Puspita	22
● Warung 味な店 Tutmak	22
● Pondok Manis 私の常宿 ホワイト・ハウス	23
● Pesan & Kesan 旅人一声	23
● Berita Terbaru その他のニュース	24
● Orang-orang Ubud うぶんな人々	25
● Studio スタジオ一覧	26
● Pengumuman でんごんばん	26

○表紙のことば○

モデルは「極通UBUD」のスタッフの一人で、僕がウブド通いを始めて以来の友人であるY嬢と、彼女のバルバルの弟であるD君です。この表紙を依頼された頃、丁度彼女がメデタク結婚されると聞き、半ばやっかみから「さらし者」にしてやるつもりで、思いっきり甘ったるく描きました。寄り添い見つめ合う二人とそれを見守るバロン（D君はバロンダンサーなのです）。「どーだ死なしかろー」と二人に突き付けたのですが、全く素直に「ありがとー！」「トゥリマカシーバナヤツ！バナヤツ！」と喜ばれてしまいました。

………幸せなヤツらにはかなわねえつ。

深谷 陽

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、MacintoshによるDTP作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方でText Dataで入稿可能な方は、以下の方法をお願いします。

☐ MacintoshフォーマットのFD (Text Data)

☐ Dosフォーマット (2DD-720KB)のFD (Text Data)

☐ E-Mail :

MHC03202 : 菅原 (NiftyServe)

GCB01162 : 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

特派員報告 トランプ詐欺・UBUD で被害者出る！

二年前、小誌 Vol.2（1994 年 4 月 25 日発行）で、タイ、マレーシアで流行っていたトランプ詐欺が、バリ（クタ）にまで魔の手が伸びたと紹介しましたが、今回はなんと我が愛する UBUD にまで出沒し、おだやかな UBUD 滞在を楽しむツーリストが被害に合ってしまいました。被害者は日本人の若い OL。道を歩いているとシンガポール人と名乗る若い女性に声をかけられ一緒にジャランジャラン。しばらく歩いていると後から一台の車が近寄り止る。宿が近いからと言って断るが、友人の車だと言って乗せられ、そのままヌサドゥアに連れていかれゲームをしてしまったそうです。トランプ詐欺のことは知っていたのだが、自分がどうしてこんなことになってしまったか理解できないという。

被害にあっていない人には「どうして？」と疑問に思ってしまうほど手口はいたって単純。しかし、車に乗り連れていかれてしまえば詐欺とわかっていても、精神的に金銭を払う結果になってしまいます。それが詐欺師達の手口です。それなら、車に乗らなければよいのではないか？そうです。確かにこの被害から逃れるには車に乗らなければよいのです。それでは、どうしたらよいのだろう？

UBUD は他の土地に比べて平和なところ、ついうっかりしてしまいますが、しかし、やはりここも外国です。旅の面白さは人との出会いでもあり、それを避けることは寂しいことですが、言葉が充分に通じていない状態で見知らぬ人に声をかけられてもすぐには信用しないで断ってください。あくまでも個人の判断に任せるしかありませんが、少なくとも行き先、目的をはっきりした方がよいようです。そして出かけるときは、知人か、宿の人に伝言していくとよいでしょう。

■日本領事館・駐在官事務所から、次のような被害の報告書が届きました。

<いかさま賭博>

昨年 11 月に連続して発生しましたが、最近はまだ増加の傾向にあります。

声をかけられ、被害者が病気のため薬等を買いつえ 2 日程親切に面倒をみて安心させる。犯人の家へ案内され賭博が始まるが、ゲームには参加しない。ゲームの途中で犯人に現金を貸して欲しいと頼まれ、カードで現金を引き出しだましとられる。

1. 事件発生： 2 月 11 日

被害者： 男性 28 才 公務員

被害額： 約 40 万円

概要： ウブド宮殿で踊りを観ていたところシンガポール人の女性に声をかけられ食事を共にする。翌日犯人の知り合いのロスメンに行き、ゲームをする。途中で掛け金を用意するためカードを使ってクタの両替商で現金を引き出す。ゲームは途中で中断し後日続きをすることになる。翌日ゲームの続きをジャカルタですと言われ犯人と共に飛行機でジャカルタへ行く。そこで金製品を買わされ取られる。犯人は被害者にホテルで待機するように指示して行方をくらました。

2. 事件発生： 2 月 19 日

被害者： 男性 26 才 無職

被害額： 約 30 万円

概要： レギャンで若いシンガポールの男女に

3. 事件発生： 3 月 7 日

被害者： 女性 28 才 無職

被害額： 約 40 万円

概要： レギャンのレストランでマレーシア人の男女に声をかけられ車に乗る。車中でガイドブックにあった「いかさま賭博」の記事を思い出したが、時すでに遅く、脅され犯人に言われるままにカードで現金を下ろし渡す。現金を渡しゲームが終わった後にさらに金品を要求され、マタハリ・スクエアで買い物を強要されるが被害者が騒いだために、驚いた犯人は逃走する。

以上のように、数例を紹介してありましたが、被害はまだまだあると思われます。みなさんも十分に気を付けて楽しい旅をお続けください。



バリの舞踏



Nandir

コリン・マクフィー（1901～1964）の「A HOUSE IN BALI」は1946年に出版された。日本語訳は1990年に「熱帯の旅人（大竹昭子訳）」として河出書房新社から出されている。1931年～1938年までの通算5年間のバリ滞在の話がマクフィーの敏感な観察力によってまとめられている。60年も前の話であるが、現在のバリにも通じる事柄が多く、身近に感じられ、大変興味深く読むことができる。

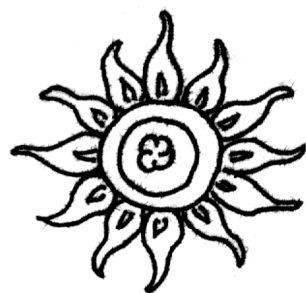
その数ある興味を引くものの中に“Nandir・ナンディール”という踊りがある。日本語訳にはナンディールとは「レゴンと同じ踊りを男の子が踊るものです。今はもう観られません、昔はよく、男の子が女の子の踊りを踊ったものなんです。」原文には「It is no longer danced. It was the origin of legong. Boys took the part of girls then more often than now.」と書かれてある。そして用語解説には「少年達が女装して踊る宮廷舞踏で、レゴンの前身。のちにこれが少女によって踊られるようになりレゴンに発展した」と説明されてある。60年も前にすでに廃れてしまった踊り、いったいこの踊りはどんなだったのだろう。もう再び観ることは出来ないのだろうか。そう考えると無性に観たくなるものである。なんとか観ることは出来ないだろうかとバリ人に尋ねるうち、ひとりのバリ人がテガラランのタロ村で観られると教えてくれ、さっそくチャーターすることにした。

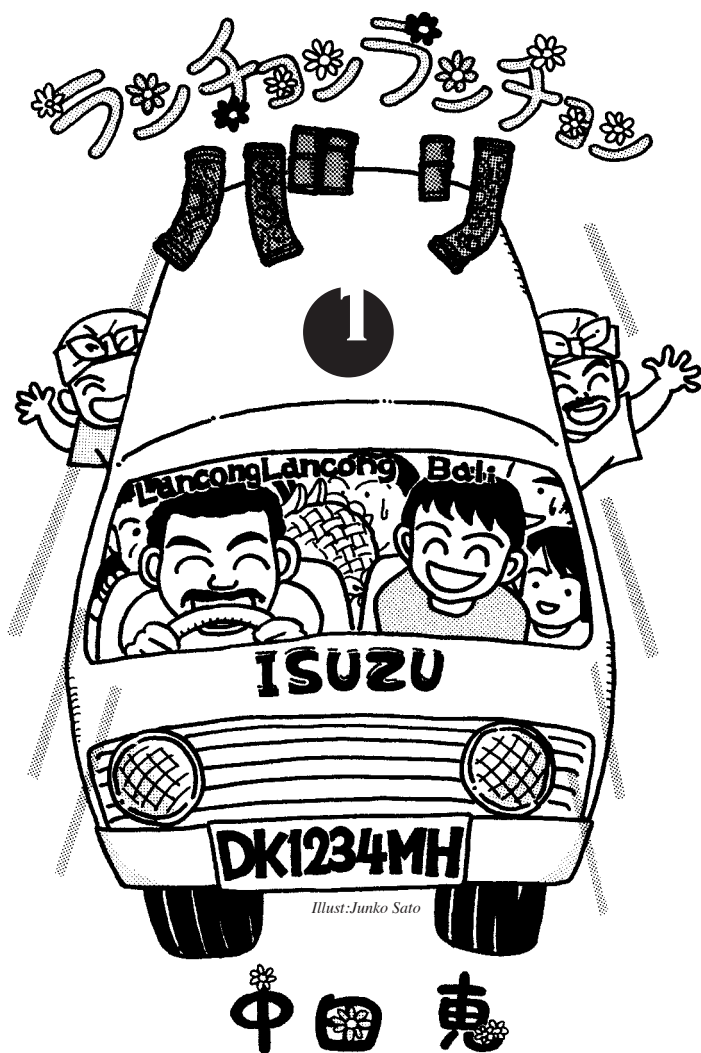
タロ村はUBUDの北方に位置し、テガラランの街道から西に折れ、深い溪谷を越えた山の中にある。直線で12kmの地点で距離的にはUBUDから近いのだが、道が曲がりくねり、悪路のため1時間もかかってしまう山間の村である。幻の踊り“ナンディール”は、Pura Agung Gunung Raungの横にある集



会場で披露された。

残念なことに、少年によって踊られると信じていた踊りが、なんと女の子の踊り手が登場してきた。そして、衣装や振り付けも、現在観られる女性舞踏とほとんど変わらず、期待が裏切られた気分である。演奏に使われたガムラン・スマル・プグリンガンは500年前からこの村に伝わるといわれ、スリンを活用した曲調は、山間の村に響き渡り感動的であった。いつか60年前のナンディールが再現されるとしたら…それは無理だろう。電気のなかったその頃、松明かココナツ油のランプの薄暗い明かりの中で、なまめかしく少年が踊ったであろうナンディールは、いったいどんな振り付けで、どんな衣装であったのか、知る手立てはなく、私達は頭の中で想像するしかないのだろうか。





● 10月12日

明け方、雨、強く降る。ここ2、3日ウブドは晴れたり曇ったりのぱっとしない天気。朝食のナシ・チャンプルーをおいしく頂き、いよいよ今日からベモの旅に出ることとする。両替も済ませ、Iさんにパサールまで車で送ってもらう。1週間本当にお世話になりました。「ずっとここにいればいいのに」と言ってもらって本当に嬉しいのだけれど、でもいろんなバリ人に出て沢山話がしたい、という私にとって、ベモでバリ島を回って来る、というのも一度やってみたかったことなのである。「何かあったらすぐに帰っていらっしゃい」と優しい言葉を頂いて、パサール前で車を降りる。

バトブラン・パヤンガン・キンタマーニと書いてあるベモのおやじが、すぐに「どこまで行くんだ」と聞いてくる。今日はとりあえず近場まで、と思っていたので「ギヤニャール」と答えると「OK、乗れ」と言う。ちょっと不審には思ったのだけども乗り込む。と、おやじはすぐに運転席に乗ってきて、ベモを発車させるではないか。しまった。「ねえ、おじさん、あたしチャーターしてないんだけど」「そーか、そーか。それなら客を拾って行こう」パサールの回りには確かに、流しのベモに乗ろうと沢山の人がそこかしこで立ってはいるが、なぜか、このベモに乗ろうという人がいない。それに、私は基本的に大きな疑問を抱いている。「ねえ、おじさん、そこにバトブラン・パヤンガン・キンタマーニって書いてあるよね。あたしギヤニャールに行きたいんだけど」「OK. OK. サカで降ろしてやる」げー、やられた、なんでサカまで行かねばならんの! わざわざ。「ちょっと待ってよ、おじさん、あたし直接ギヤニャールに行きたいの。ベモ替えるわ。」と言った時、ベモは丁度JLハヌマンにさしかかるところ。おやじ、そこでベモを止めて「じゃ、ここで降りろ」「降りるけど、ここまでのお金は幾ら払えばいいの?」「いらんわ、そんなもん」おじさんごめんね、と何故か謝り、ベモを降りる。のっけからこれだ。教訓1) 慣れないうちは、ベモの行き先は必ず確かめましょう。そこへ運よく1台のベモが通りかかる。ちゃんと“ギヤニャール”と書いてあるではないか。なおも「どこ行き?」と確かめる私に、「ギヤニャール」との返事。めでたくギヤニャール行きのベモに乗り込む。パサールで買い物を終え大荷物のイブイブや、これからオダランに行くらしい正装の家族連れなどを乗せ、ぎゅうぎゅうになりながら、ベモは小さい身体で良く走る。ほどなくギヤニャールに到着。ウブドとは違って、本当に「普通」の街、ギヤニャール、とりあえず来てはみたけれど、別に当たりをつけておいた宿がある訳でもなく、特に行きたいところがある訳でもない。うー、暑い、とりあえず何か飲んでから考えよう…と思って歩いていてふと

これは去年の10月、会社を辞めて念願のバリ2ヶ月滞在を果たした時の、個人的な日記の一部です。ランチョン、とは、見物する、とか、観光する、といった意味があるようで、いろいろなところで“スダ・ランチョン・ランチョン?”と尋ねられました。“ブルム”などと言おうがものなら“一緒に行くうよ”ってことになってしまうんですけど…。でも私はこの“ランチョン・ランチョン”という可愛い響きがすっかり気に入ってしまいました。

気付いた。ここはウブドではないのである。探したって勿論カフェなんてないのだ。当たり前だが。とりあえずもう少し、宿を探して歩いてみよう…。うーん、少し歩くと暑い…やられてしまう暑さである。小さな宿を一軒発見。しかし通りから奥まったところにあり、夜にはいかにも犬の溜まり場になりそうな危険を感じて少し躊躇する。バリの犬は正直苦手だ…。もうちょっと歩いて、それで泊まる所が見つからなければ、まだ昼前だし、クルンクン行きのベモに乗ってしまおう、と思っていたところで、小綺麗なルマ・マカンを発見。しばし休憩することとする。冷えたテ・ボトルを飲んで、ふーとひと息ついていると、愛想の良い店のお姉ちゃんが前に座る。「どこから来たの?」「ウブドから、今着いたところ」「日本人?」「そうよ」「バリは良く来るの?」とたいい最初に話すような会話をとりとめもなく続けていると、「そう言えば、前にも日本人が来て、うちの旦那が闘鶏に連れていったのよ。」と言う。「え?闘鶏?」そうだ、ここは天下に名高い闘鶏のメッカ!ギャンャールだ。「あたしも見たいなあ、闘鶏」と言えば「多分、今日もやるんじゃない?」との返事。「どこで?何時から?」「あたしは知らないけど…。でもうちの旦那に連れて行ってもらえばいいわ。」「でもそれじゃ悪いわ、仕事だってあるだろうし…」と一応遠慮はしてみたものの、バリ人の連れがいるといないでは、確かに気分的に大きく違う。「大丈夫よ。仕事って言ったって一緒にここ、やってるのよ。手伝いの女の子もいるし、ねえ大丈夫よねえ。この日本人が闘鶏見たいんだって、連れてってあげられるわよねえ」とその愛想の良い姉さんノニは気前良く旦那アグスを呼ぶのだった。「いいよ、連れてってあげる。どこに泊まってるの?後で迎えに行くよ」と、今会ったばかりだと言うのに、旦那も旦那で人が良い。しかし言われて気が付く。そうだ、宿を決めてなかったんだ。「実は、今日はこのへんに泊まろうと思って今、宿を探してるところなの。この辺にいい宿あるかしら」「あら、うちの旦那の実家は宿屋よ。良かったら案内するけど」と言うことで、アグスのバイクの後ろに乗り、とりあえずその宿「ASRI」へ行くこととする。ルマ・マカンからバイクでほんの2、3分、「ASRI」は入り口に新し目の部屋が5部屋、並んでいる。清潔そうな宿である。ところがこの5部屋、なんと全て埋まっていると言うのだ。見掛けによらず、なかなか繁盛している。そして通されたのは奥にある古い建物の内の1部屋。カマル・マンディはついているが、WCは共同、しかも周囲には古い大木が聳えていて、蚊の攻撃から逃げられそうにない。その上一番困ってしまったのは、シャツ…これが、いつ替えたのかわからない…。でも、アグスの実家だし、闘鶏に連れて行ってもらうんだし、1泊くらいなら蚊取線香を多めにたいて、シャツも、こんな時のためにパティックを持ってるんだし、なんとかしのげなくもないか…と、1万RPはちょっと高いかな、とも思ったが、今日はここに泊まることとする。ところが、これが何と、実は、とん

でもない宿なのであった。

奥の建物には4部屋、更にその向うについ立てがあって2部屋、合計6部屋が並んでいる。早速近くのスーパーで買って来たジュースを飲みながらテラスにいます、そこへベモが1台入って来た。奥から出て来たアグスのおじいさん、すなわちこの宿のオーナーは、ベモから運転手が降りると何も言わず、そのついでに奥の部屋を指差す。まるで何か、例えば約束してあった商品を受取りに来ました、って感じで、いとも当たり前の顔をして運転手はその部屋に向かっていく。と、何と、そのベモから、女が一人降りてきて、運転手と一緒にその部屋に入ってしまったのである。そしてしばらくして、水浴びする音が聞こえてきた…。ぎょえー、ここは、もしかして、その手の宿かー。でも、ついでにわざわざある、ってことは、つまりあのついでにから向こうは、そういうことのために使う、ということなのであって…と必死に頭の中で思考回路をフル活動させる私。(しかしこれが甘い考えであったことは後で判明する…。) そんなこんなでひとりでドキドキしているところに、アグス登場。「闘鶏が、もう始まっているから、迎えに来た」と言う。嬉しいような残念なような(?)気持ちで、アグスのバイクの後ろに乗せてもらう。通り過ぎる時に、チラリとその部屋を見れば、カーテンはしっかりと閉められていた…。

闘鶏の場所まではかなり遠く、アグスのバイクの後ろに乗っていると、結構注目的!クタやウブドとは違って、バリ人男性のバイクの後ろに乗っている日本人女性なんてそんなにいないのだ。(全くいない訳じゃないと思うけど)道端のワルンで一服しているおじさんや、連れ立って下校途中の中学生達に、必ずと言っていい程振り返られてしまう。何気ない振りを装ってはいるが、これは実はちょっと恥ずかしいかもしれない…。その上、行けども行けども、闘鶏なんてやってる気配はなくて、いい加減ちょっと不安になりかけた頃、行く手に何となく、それらしき雰囲気。大きな木の下に大勢の人ばかりである。バイクを止めて降りてみれば、やってる、やってる。いつぞやブヌスタナンで見たのとは規模が違う。200人くらいは集まっているだろうか。丁度1勝負終わったところと見えて、人の輪が崩れる。そして次の顔見せ(鶏見せ?)、自慢の鶏を持った男達が中央に集まってくる。それにしても凄手数のパパパパである。今日は何の日?普通の日でしょーが。ほんとにこの人達みんな今日の仕事は終わったのかしら、それとも仕事がないのかしら。それとも仕事があったって、闘鶏があれば休んじやうのかもしれない。これだもの、バリ人相手にビジネスしようとしたら莫大なエネルギーを必要とする、といつもため息をついている友人の顔をちらと思い出す。本当に毎日お祭りだもの。こうして気楽な旅行者としては、実

に毎日楽しいところではあるが…。と、私がこんなことを考えている間に、次に戦う鶏は足に赤い糸でナイフをしっかりと結びつけられている。とーっても丁寧に結びつけられたナイフは足のところでぴんと立って結構こわいものがある。中央にナイフをつけた2羽の鶏が、それぞれの持ち主に連れられて出てくると、一斉に“チョチョチョ”とパパ達の、賭の相手を探す声であたりが突然活気付く。そして闘いが始まるのだが、はっきり言ってチャロナランの時とおんなじで、皆興奮して立上がるので、私にはまるで見えない。人々の背中ごしに雰囲気を感じ取ってうーむ、これが噂に聞くギャニャールの闘鶏というもののか、と立ちすくむのみなのであった。でも、背伸びしてもものぞきこめない闘鶏を見るより、勝負の結果に一喜一憂するパパ達を見ている方が面白かったりしてパパ達を見つめる私。そんな私に気がつく、“おや、こんなところにオラン・ジャパンがいるぞ”と、パパ達も一応は私を見るんだけど、勝負の方が大事と見えてあまり注意を払うひとはいない。でも、と言って“排斥”するような感じはまるでない。これがバリのいいところなのだ。ここにいるイブと言えば、ナシ・チャンプルやクエを売ってるおばさんが4・5人いるだけ。勿論背伸びして闘鶏をのぞきこんでいる女なんて、私一人である。アグスは、と言うと「僕は闘鶏はやらないんだ。本当言うとおんまり見るのも好きじゃない。」と言って向こうへ行ってしまった。そして向こうで友達に会ったと見えてさっきから二人で何かしら楽しそうにおしゃべりしている。闘鶏をのぞきこんだりパパ達の様子を観察させてもらっている内に、勝負もいくつか決まったと見え、その度に人の輪が少し崩れ又移動する。そこへいきなり雨が降ってきた。「もう満足した？」とアグス。雨でバイクが濡れるのが気になる様子。「どうもありがとう。帰りましょうか」と言うとしほつとしたい。ごめんね。でもアグスのバイクでちょっと走るともう雨は降ってない。雨を追い越して走る…と言ったところか。

「うちで御飯食べていかないか？」とアグスに言われ、朝のナシ・チャンプルから何も食べていないのに気がつく。夕食にはちょっと早いけど、でもお礼もしなきゃいけないし、とさっきのルマ・マカンへ行く。この店はもととアグスの奥さんノニのイブがやっていた店らしい。しかし今ほとんど店を切り盛りしているのは娘のノニと手伝いの二人の女の子カデとニョマン、そしてノニの旦那アグスも時々思い出したように店を手伝ったりしている様だ。このカデ、っていう女の子が可愛いなのなんのって。「あー、マンディしたーい」「まだマンディしてない」「もう家に帰りたい」とか言いながら鳥をむしったり、チャベの種を取ったりしている。美人、というのじゃないけれど、本当に

可愛い。年を開けば15だと言う。「学校は？」「学校、好きじゃないのお」「えっ、行ってないの？」「やめちゃったあ。ここで働いてるし…」「いいの？」「いいの、いいの」「毎日働くの？何時から何時まで？」「朝7時から夜9時まで」「えー、働き者だねー。家族は？」「お父さんはもう死んだ。お母さんは結婚してジャカルタにいるの」「えっ、じゃ、あなた一人で暮らしてるの？」「友達の家にいるの。友達と一緒にだから平気よお」にこにこ笑いながら、ちょっと語尾をのぼすところが本当にまだあどけなくて可愛い。出来たばかりのサテ・バリを頂きながら、皆でおしゃべりする。「いつも日本人は何を食べてるの」とノニ。「えーと、御飯でしょ、スープでしょ、魚の焼いたのに、野菜に…」と言えは「あら、おんなじね」「おんなじよ。でも辛いけどね。日本人はケチャップ・アシンが好きなのよ」「チャベは日本にあるの？」「生のものはない。でもね、私、種を植えて育ててるのよ」「チャベを？」「チャベだけじゃないわ。きゅうりや茄子や、カンクンも作ったのよ」「カンクンはトゥラシでゴレンするのが美味しいんだよ」「うーん、でも日本人の舌にはそれよりもルプスしてケチャップアシンをつけて食べる方が美味しいのよね」と言ったところ一斉に「えー」「何それー」「そんなの食べられないよー」と言われてしまう。「変かしら」「変だよ。へん」でも、でも、カンクンのおひたしは、それはそれで美味しいのだけど…。うーん、でも“おひたし”ってインドネシア語で何て言うんだろう。「サユールヒジョウをルプスしてケチャップアシンをかけて食べるのは、日本の習慣」と言ったらなんと不思議そうな顔をされたしまったのだった。

ミ・クワを食べて、アクアとコビを飲んで、パッソーとサテ・バリまで頂いて、さあ帰ろうと思いつ段を聞けば、アグスが「いらない」と言う。「なんでー、闘鶏も連れていってもらったし、こんなに沢山飲んだり食べたりしたんだし、駄目だよ、私払うから」と言っても「いらない、いらない、友達になったんだから、僕イギリス人の友達もいるんだよ」と、訳のわからんことを言う。イギリス人の友達は別にいてもいいけど、それとこれとは話が別だよ。でも、こうなったらまず、お金は受け取らないだろうな。明日又来て、最後にまとめてお礼すればいいか…と思い、今日の所は送ってもらって宿へ戻ることにする。帰ってみればベモはなく、そして例の部屋もすでに人影なく静まりかえっているのだった…。

バリと私の赤い糸

みき



私の練習開始は一応8時30分。だから朝食をとるとすぐ、パダントゥガルのロスメンからブンゴセカンへ。そして一声「スラムッパギ」すると Bapak が「Selamat Siang」（えっ？パギやんなあ）。Ibu は「Selamat Datang」（「いらっしやい」かな。なんかうれしい）と返してくれる。で肝心の先生は…いないっ！近くの川までマンディに行ったらしい。それから30分、私は庭にいる鶏や犬、ネコを見たり、表の道へ出るために庭を横切る裏手に住む人達にあいさつしたりしながら、先生の帰りを待つ。すぐそこからは、先に練習をはじめた友達のガムランが聞こえてくる。忘れられたのか、寝坊したか分からないけど、練習初日にして、私が行ったらまだ寝てたなんてことがあった後となつては、このボーッと先生の帰りを待つ時間は苦にもならず、すごく心地よい。反面、練習が始まるとボーッとする暇はない。横について踊る先生を鏡を通してまねてついていくのも大変だし、何より自分よりもめっちゃくちゃ色っぽく踊る様子を見てみると、女として悔しくて仕方なく、つついムキになってしまう（で余計に顔が恐くなる）。そうなんです、私の先生は男性なんです。そしてちょっと気がゆるんで、ピンと張ってなきゃならないヒジがさがろうもんなら、横から容赦なくピシャリと叩き上げてくれる。

ここまでくるとちょっと休憩。Ibu が入れてくれたお茶を、冷たいタイルの床にペタンと座って飲む。そして、私がバリでの夢や友達のこと、昨日あったことなどを話す。休憩後「どうしよう、まだ踊った方がいい？」なんて人事のように私が言うと、決まって「Up to your」という答えが。で、「う～ん、じゃああと一回。ラストラスト」と言おうもんなら「えっ二回？」とわざとニヤケてみせる先生。つられて「じゃあいいわよ、あと三回踊るわよ！」と又ムキになる私。

踊っている時はもちろん、休憩時間も含めた、その雰囲気がとても好きで、益々私をバリに引きつけます。踊りを通して見たバリが一番自分にとって身近に感じる事が出来るんです。「あっ、バリって私にあってる」そう感じるんです。なんだか私にとって踊りは、バリと私の間にある赤い糸のような、そんな気がします。

全公開！ ラワールのすべて

代表的なバリ料理として、バビ・グリーン（豚の丸焼き）と並んで紹介されてきたラワール。ガイドブックなどに写真入りで載っているのをよく見るし、もしかしたら皆さんも知り合いのバリ人のお宅でご馳走になったことがあるかもしれません。でもいまひとつ、その実体が明らかにされていないような気がします。ラワールとはひとことで言っちゃうと“肉や野菜を細かく刻んで、香辛料であえた料理”。「な～んだ、カンタンじゃん」と思うと、それがあなた、けっこう奥が深い料理なんですよ。

たとえば、写真や実物のラワールを見て、何が入っているか、何が混ぜられているか、あなた、わかりますか？ わかんないでしょ～？ 「なんだからよくわからないが、ムリヤリ食べた」人も多いはず。そこで、ずーっとさぼっていて今回久しぶりに登場したエナちゃんがおおくりする“今、明かされるラワールのナゾ”、たっぷりとお賞味ください。

ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK



★ココナツの果肉をする、ひたすらする。

■ Kapan（いつ）？

ラワールを作るのはいつ、どんな時か。

そうです、ラワールは、お祝いやいろんなウパチャラ（儀礼）の時、なくてはならないご馳走です。

各家庭で行われる、赤ちゃんのウパチャラ、オトナン（バリ暦の誕生日）、ボトン・ギギ、結婚式、家寺のオダラン、家屋を改装、新築した後のウパチャラ、お葬式、ガルンガン、クニンガンなどには必ず登場します。

その他、何かめでたいことがあった時や会食の時、ニュピの前日なんかに作っちゃいます。

村々の Pura（寺院）のオダランの時にも作ります。

■ Di mana（どこで）？

各家庭で作る時は、台所のオープンエアーのスペース。

村もしくはバンジャールの Pura で作る時は、寺院の中の Jaba Tengah（ジョボ・トゥンガー）というところ。

寺院の中では、一番外側のスペースにあたり、台所（らしきもの）も備えています。

■ Siapa（誰が）？

ラワールは男の料理。材料の調達や下ごしらえを女性達手伝ったりしますが、肝心の料理は、すべて男達の手で行われます。

■ Apa（何を）？

ラワールの材料は、大きく分けて肉、野菜、香辛料＆調味料。それぞれについて説明しましょう。

◆肉…

サピ（牛）、バビ（豚）、アヤム（鶏）、ペベッ（あひる）など。めずらしいものではプニュー（海亀）、カンビン（山羊）、ニャワン（ハチ

の子)、リンドゥン(田うなぎ)、そうそうコウモリなんかも聞いたことがあります。ちなみにエナちゃんが一番好きなのは、うす焼き卵を刻んだラワール。要するに、肉は何でもOKらしいです。でも基本的に、一種類のラワールには一種類の肉。二種類以上の肉を混ぜることはまずありません。中でもウパチャラの時に特にポピュラーなのは、豚のラワール。肉、レバー、皮、生血などを使います。

◆野菜…

若くてまだ実が白いナンカ(ジャックフルーツ)、同じく若いグダン(パパイヤ)、カチャン・バンジャン(十六ささげ豆)プリンビン(スター・フルーツ)の葉、サラムの葉、ぜんまい、あずきなど。野菜もたいてい一種類のみを使いますが、カチャン・バンジャン、プラスあずきなどは混ぜても相性のいい組み合わせ。そしてほとんどのラワールに欠かせない材料がココナツの白い固い果肉です。

◆香辛料&調味料…

クスノ(にんにく)、バワン(赤タマネギ)、タバヨー(とうがらし)、クニツ(ターメリック)、イセンとチュコー(いずれもしょうが科。独特の香りが強い)、粒こしょうや長こしょうなど。他にスレー(エビを発酵させたペースト)や塩。

■ Bagaimana (どのように) ?

料理の仕方。

1. 肉はゆでる、揚げる、など調理してからひたすらこまかく刻みます。豚のラワールの場合、ほとんど生肉状態だったり、生血を使ったりします。
2. 野菜は、ナンカは生のまま、他はいったんゆでます。そのあと、肉と同じように細かく刻みます。
3. ココナツの固い果肉はいったん直火であぶりま

★刻む、刻む、ひたすら刻む…けど、たまあに休憩。



す。果肉の中にいる虫を殺すのと、風味をよくするためです。あまりこげない程度に焼いた後、フレック状にすりおろし、さらに細かく刻みます。

1～3の“ひたすら刻む”作業がラワールづくりの楽しい一場面。上半身裸、サルーン一枚を無造作に腰に巻いた男達が、台所前の大きな縁台にあぐらをかいて座り込み、木の株のまな板の上で斧のようなナイフを使って“トントン トントン”“トントン トントン”と刻みます。その音がとてもリズムカルで、何人もの“トントン トントン”が重なると、偶然なのかわざとなのか、ケチャやガムランのリズムのように聞こえたりするのです。

雑談をしながら、グダングラムの煙をくゆらせながら男達がラワールを刻むシーン…、なかなか風流でいいものです。

4. 次は、前にも述べた香辛料(けっこう大量)を石臼でつぶし、たっぷりのココナツオイルで香りが出るまでいためます。赤タマネギはうすくスライスして、いったん水にさらし、しぼってから、カリカリのキツネ色になるまで揚げます。スレーをやはりオイルで炒めて香りを出します。
5. さあ、1～4を、大きな洗面器のよううつわ



★秘伝の味付けが、ここで決まる。

で全然生臭くなく、とってもおいしいのです。でも、エナちゃんは昔、小学校の家庭科の授業で「豚の生肉には寄生虫がいるので、必ずよく火を通してから食べましょう」と習いました。そんなことを考えると「もう二度とラワールなんて食べないゾ」と思っちゃう人も多いかもしれませんが、もし寄生虫がいたとしても、実は混ぜる強い香辛料によって、死んでしまうらしいです。だから、エナちゃんも、もう何年もラワールを食べ続けているけど、ダイジョーブ。Tidak Apa Apa.

朝作ったラワールの残りは、昼になるとバナナの葉に少しづつ包んで蒸し焼きにします。これをトゥムといいます。

の中で、混ぜ合わせませす。これがラワールづくりの総仕上げ。この時の手さばきが、男の腕の見せどころとなります。手首のスナップとしなやかな指を使って、1～4をどのような分量で混ぜ合わせるか、塩加減や香辛料の効かせ具合はどんなもんか。まわりで見ている家族に味見をしてもらいながら、みんなで「あれが足りない」「これが多すぎる」とワイワイしている様子は、まさにラワールづくりの佳境といってもよいでしょう。同時に、コモーというラワールスープも作ります。豚の生肉&生血入りのラワールを少し別ナベにとり、適量の水と調味料を多めに加えたものです。それを火にかけるか、というところではなく、やはり生のまま、ごはんとともにいただきます。

エナちゃんがバリの家庭で、一番よくご馳走になるのは、豚肉（ほとんどレア）&生血、茹でた皮、生のナンカとココナツのラワールです。色が真っ赤っかで、思わずぎょえぎょえなのですが、意を決して口の中に入れると、ほどよい香辛料の効き具合

事あるごとにラワールを作っているバリの人々、それでも、これは彼らにとっては、とっておきのご馳走で、私達外国人にも「いついつに作るからぜひ食べにおいで」と誘ってくれます。お祝いのラワールに誘われたら、喜んでいただきましょう。

ところで、こんどエナちゃんのお義父さんになるパパは、日本人のお客さんにラワールをすすめる時、日本語で「ブタノ サシミィ～」と嬉しそうに言うのですが、それだけはやめて欲しいと密かに思っているエナちゃんです。

ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK

オダラン初体験

松井千苗

ガムランの音が鳴り響く夜十時過ぎ。汗ばみながら、騒つく熱気を感じる。いっせいに歓声が沸いてきた。男達が、女達の周りを囲うようにして、今夜の芸能の出し物を観ながらつつきあい、あれこれと騒いでいる。

今回の旅行はいろんなことがあった。そして、それぞれがとても印象深い。あえて一つに絞るならやっぱりオダラン初体験ではないだろうか。あの場の雰囲気と興奮は今でもはっきりと思い出せる。昼間、居酒屋「影武者」を初めて訪れ伊藤さんと話をし、情報をたくさん頂いて、気付けばバイクの後部座席に座ってオダランに向かう途中だった。パリに来てまだ日も浅く、何も知らない異邦人の私が突然お邪魔しても本当にいいのだろうか。急な展開に戸惑いながら言われるままに、おじさん二人（伊藤さん、大原さんごめんなさい、冗談です。笑）のうしろをくつついていた。正装をした人々を見かけ、いよいよ目的地が近いのを知る。好奇心に期待や不安、いろんな感情が入り交じる。もちろん目的地はオダランである。オダランでは大勢の人々が賑やかにそれぞれなにかを楽しんでいるようだった。賭博を楽しんでいる人もいた。お祈りの仕方を教わり、見様見真似でそれらしきことを村の人に交じてさせてもらった。

芸能は私が前の晩、プリ・サレンで他の観光客と一緒に見たものとは違っていた。技術面はわからないけれど楽しさがまるで違う。踊り子が登場の時につまづくというハプニングがあった。あっ?日本人とバリ人の違い?その日一番の歓声。しかし踊り子は平然と踊り始め、動揺の影はほとんどない。ひゃー。観衆が観衆なら踊り子も踊り子だ。

物語が始まる。登場人物は王様と娘。王子様と恋のライバルで悪役の王様。お決まりのストーリー。最初、言葉がわからず一人笑いから取り残されていた。私はオダランで催される芸能は、すごく厳かなものばかりと思っていたが、実際には、おかしくて滑稽な場面がひんぱんにあり、ギャップの違いに驚きながら、いつのまにか悪役と王様と子分たちのどたばたを隣に座っているクトゥという名の女の子と顔を合わせて笑っていた。

バリ人気質か熱帯人気質なのか、公の場でよそ者に対して注目にしても、嫌な顔を見せないのには驚いた。笑いのうちに舞台が終わって（拍手はなし、軽くカルチャーショック）興奮さめやらぬまま席を立つ。オダランの余韻はいつまでも続いて、翌日、宮殿で別のパフォーマンスの踊りを見た時、しまったーと思った。たった一回オダランに参加しただけなのに、もう目の前の踊り（雰囲気?）が味気ないものに映る。変なものを覚えさせられちゃったなあと、一人苦笑い。

このオダランの他にも、すごくレベルの高いケチャ。ヌガラジェゴグ。別のオダラン。日本人カップルへの手作りの結婚式。これらはみな影武者の伊藤さん達との関係で観る機会を得た。

今回の旅行は、自分の甘えを捨てて人に頼らず自分でやってみようと意気込んでいたけれど、結局は思いっきり依存することになってしまった。けれどそんな意地よりも、三週間という（ウブドは実質15日くらい?）短い期間でこれだけのことを体験できたのだから申し訳ないくらい、すごく感謝しています。時々、自分がその場にいることを後ろめたく思うほど素晴らしいものばかりだった。ウブドを離れロンボク島（5日間滞在）でも、やっぱり頼ることになってしまった。だけど人は人に頼り頼られながら生きてゆくのかもしれない。これも私の甘えだろうか…?人との出会いもこの旅行自体も、もしかしたら人生自体が偶然の積み重ねで、どう生かすかは自分次第なのかもしれない。たとえ何かに直接つながらなかったとしても、この不思議な偶然（縁?）を大事にしたい。今は何も持たず、何も出来ない私だけれど、いつか何かを通じてでもお返しが出来れば、そんな人間になりたい。

追伸：本当にお世話になりました。ありがとうございます。もう気付いているかもしれませんが、私はかなりそっかしくて、運も悪い方です。（本当の本当は分からないけれど）。これからもどうぞよろしくお願いします。

野焼き

その昔、耶馬台国の卑弥子が黒潮によってインドネシア諸島のある島に上陸した。ここバリ（場利）島がその地ではないかと、自称人類学者のA氏は発言する。

その時代にUBUDは「産土」と記録されている。読んで字のごとく、土を産む所。良質の陶土が産出され、焼き物の産地であったようだ。「産土」の焼き物は、シルクロードを經由して遠くヨーロッパへ運ばれたという史実がある。

❖1



な～んちゃって、むちゃくちゃな話を作ってみました。まさか信じた人はいませんよね。これはあるゴロ合わせの大好きなツーリストが「UBUDは産土と書くのかな？」という言葉から思いついたまったくいい加減な作り話である。

❖2



さて、ここからは、真面目な話。バリでは陶器が焼かれていたのか？ 現在、見られる物は屋根瓦、壺、水差し、調理器具、そしていろんな儀式の時に使われる道具くらいだ。いずれも素焼きの物である。最近バリでお土産用に売られ始めたうわぐすりを塗った食器類は、いずれも高温でしか焼けないジャワ産の白い陶土を使ったものである。バリで作られる陶器に、食器類が見られないのは、昔からバナナの葉やココナツの内側の固い殻が食器として充分間に合ってきたからだろう。バリの焼き物の歴史は、資料もなく皆目わからないのが実情である。しかし、土産用に売られているワン・パターンの灰皿やろうそく立てだけでは、何か物足りない。そこで「焼き物大好き人間」たちが集まり、

❖3



❖4



❖5



❖6



「それでは、バリの土を使って、もっと面白い物を作ろう」ということになり、まず陶土探しとなった。ところで、バリのどこに肝心の陶土はあるのか？情報では、カラングスムの KUBU という場所も聞いたが、結局、素焼きの陶土で有名なタバナン県タナロットの近く、ベジャテン村で陶土を手に入れる事が出来た。

焼き物大好き人間の中の一人が幸いにして、プロの陶芸家であったため、我々素人にはわからないことをアドバイスしてもらった。まず、バリ産の陶土は、ベジャテン村の物も含めてすべて低温（800～900度）で焼くものであること。1000度以上の高温で焼くと真っ黒になり溶けてしまうこと。適温でうまく焼き上がると、テラコッタ風の美しい赤い色になり、乾いた音がすること、などなど。

ベジャテン村も昔はココナツの殻で焼いていたのであろうが、今は温度調節のできる重油による近代的なカマを使い、磁器も焼いている。

そこで、我々焼き物愛好家は、ベジャテン村の陶土を使い、古代原始からの技法である“野焼き”をすることにしたのであった！我々は子供のように喜び勇んで、にわか陶芸家となった。野焼きに挑戦したのは、UBUDの村はずれのとある場所である。

以下はそのドキュメントである。

●まず野焼きをする場所にバンタンを供える。

焼き物は空気、火、水、土、つまり自然界の力が結集して出来上がるものだ。日本でもほとんどの陶芸家は、カマに火を入れる前に日本酒を供えて、お祈りをすると聞いた。

1. 床焼き…野焼きをする場所の土を乾かす。今回はココナツの殻で1時間ほどかけて焼いた。その時、品物を周りに置き乾かす。床焼きをした後のオキを取り除き、少し冷ます。
2. 品物を並べる…大きな物を中心に、平べったい物は立てて、小さい物は大きな物の中へモミガラと一緒に入れる。
3. あぶり…品物から1mほど離して円形に薪を並べ火をつける。火の回りが良いように、ココナツの殻と細かい木を使用。火はあまり強くならないように。そして、円がだいたい同じくらいの炎で燃えるように薪を足していく。
あぶりは2～3時間。
少しづつ薪の円をせばめ、一段せばめるごとに2、3回薪を足す。
品物と薪がくっつく位まで近付けたら、しばらく均等に火が回るようにする。この時、品物は煤で真っ黒になっている。
4. 煤切れ…炎の中を覗いて、品物が白っぽく変わってきたら煤切れ。
煤切れが始まったら、薪を品物にかぶせる。
薪は投げ込まないように、静かに置く。

5. 大炊き…薪を品物にかぶせてからは、火の加減はあまり気にせずとどろき焼く。

2時間位。

火が少し引いた時に品物を覗いて、ポウッと赤くなっていたら焼けている証拠。それから2、3回薪をくべて、一度火が引くのを待つ。

6. 火が引いたら全体にモミガラをかぶせる。モミガラが沈んだ所にモミガラをさらにかぶせる。（隙間から冷たい風が入ると、冷めギレをおこす）

●雨が心配なのでトタンをかけて今日の作業は終了。

7. そして翌日、取り出してみる。大成功！

にわか陶芸家たちが作り上げた力作が、次々とモミガラの中から現れる。ランプシェード、壁飾り、箸置き…ユニークな作品が出来上がった。バリでバリの土を使って陶器が焼けた！焼いている間、常に火の状態を見守らないといけないため、日中照りつけるガラガラ太陽と燃えさかる薪の炎は灼熱地獄である。ほとんど拷問のような体験であるが有意義なものであった。最後に滞在中惜しみなくご協力とご指導をくださった陶芸家の杉本まりこ嬢に、熱く、暑く、厚く、篤く感謝申し上げます。

（まりこ嬢は、日本でもバリをイメージした素晴らしい作品を創作し、人気を得ています。興味のある方は、極通 UBUD スタッフまでご連絡くだされば、展覧会のご案内などを送らせていただきます。）

次号（かどうか確かではありませんが）バリで昔から使われてきた伝統的な調理器具、食器、などの解説もしたいと思います。お楽しみに…！



◇7



Bagaimana Caranya?



民族芸能カセットの選び方

南部 弘

今、この本を手に行っている貴方は、バリの民族芸能を一度は経験された人の筈です。バリ舞踊やガムランを習ってらっしゃる方も、大勢いるかと思ひます。

日本に帰ってからもガムランを聴いて、バリの思い出をフラッシュバックさせたい、そう思つてモンキーフォレストのカセットショップに走った人も多い事でしょう。ところが、そこに待ち受けるのはおびただしい種類のカセットの壁。どれを買ったらいいのか判らない。自分が何を欲しいのかも判らない。あれこれ迷ったあげく、結局は、ちっともベストじゃない、『BEST SOUND OF BALI』なんかを買つて、

「俺が聴きたいのは、こんなんじゃないんだー！」

と嘆いた人も、一人や二人ではない筈です。

そんな人の為に、私なりのカセットの選び方をお教へいたします。

★CHECK POINT 1【音質の確認】

ご存じとは思ひますが、ことガムランに関しては、洒落にならないくらい粗悪な音質のカセットが、立派な商品としてバリでは流通していますので、購入する前に試聴する事をお勧めします。勿論、店のデッキでの試聴も出来ませんが、出来れば店員の了承を得て、持参した自分のウォークマンで確認した方が良いでしょう。この場合、この位が我慢の限界、というレベルのテープと較べると良いでしょう。どのみち、オーディオマニアを唸らせる程、素晴らしい音質の物など期待出来ませんので。

★CHECK POINT 2【きちんと収録されている事を確認】

片方のチャンネルが入っていないか、片方が全く収録されていないか、あるいは欠陥商品も見受けられます。又、テープの長さが足りなくて、曲が途中で切れている、なんて事もしょっちゅうです。これも注意しなければなりません。

★CHECK POINT 3【収録内容が正しい事を確認】

これに関しては、曲を知らないと確認のしようがありませんし、まさか店先で一本を聴き通してから、「やっぱり買わない。」

なんて言う訳にもいかないので、ある程度は諦めて下さい。念の為に断っておきますが、曲順が違ふ程度の事は頻繁にあります。

以上のチェックの順番としては、まずA面を頭から再生して音質、そしてケースと中身が合っているかどうかのチェック、少ししてからB面にリバースして、B面が最後まで収録されている事を確認、そのままB面を巻き戻して、B面が最初から収録されている事を確認、最後にA面にリバースして、A面が最後まで収録されている事を確認、といったところでしょうか。ああ、面倒くさい。

さて、では、実際には何を買ったらいいのか？

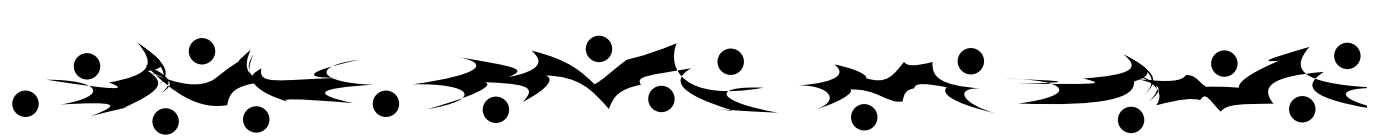
ごひいきのグループがある場合は、迷う事はないでしょう。そのグループのカセットを買えばいいのです。踊りやガムランを習っている人も、自分が練習に使用しているカセットを買うでしょうし、先生に勧められてもらってもいい訳ですから、問題はありません。

でも、一般の旅行者の場合は、そういう訳にいきません。

「良く判らないけど、いいのが欲しい。」

こういうのが一番厄介な訳です。

ま、適当に数本選んで、当たった外れたなんてやるのも楽しいものですが、例えば私だったら、以下にあげるような基準で選んだカセットを、人に勧めます。



●その1 【バリ舞踊の伴奏音楽】

舞踊を伴う楽曲としておさえておきたいのは、BARIS、TARUNA JAYA、LEGONG LASEM、OLEG TAMULILINGAN、PENDET、KEBYAR TROMPON といったところです。これらの内、三曲以上が収録されているカセットを一本捜して下さい。これが入門用です。特に、BARIS だけは絶対に外さないで下さい。基本中の基本です。

●その2 【本式のレゴン】

さて、上記『その1』の方法で選ばれたカセットは、まず間違い無く、GONG KEBYAR という編成で演奏されている筈です。実は、前述の中の一曲、LEGONG LASEM を演奏するには、専用の楽器群があります。一世代前の編成で、SEMAR PELEGONGAN と言いますが、一般には、SEMAR PEGULINGAN という名で通っています。出来れば、LEGONG LASEM を、SEMAR PEGULINGAN で演奏している物も一本加えて下さい。

ここで少々問題があるのですが、LEGONG LASEM は、全曲で30分以上もある大作の為、ダイジェストしていない限り、60分テープが主流のバリでは、A面とB面に振り分けられている事が多い様です。しかし、途中でブチッと切れてしまうのでは、何とも興ざめです。出来るなら続けて聴きたいものですが、丁度いいカセットがあります。PELIATAN の有名なグループ、TIRTA SARI が、様々な種類の LEGONG を収録した、90分に渡る長尺のカセットを発表しており、これは切れる事なく、最後まで聴き通す事が出来ます。他のカセットと比較すると、値段も2割程高いのですが、演奏内容も素晴らしいので、これをお勧めします。オレンジ色のカバーで、タイトルは、『THE CLASSICAL LEGONG KRATON OF PELIATAN』です。

●その3 【スマル・プグリンガンの演奏曲】

その2でお勧めしたのと同じ SEMAR PEGULINGAN で、演奏曲を中心に収録されたカセットもお勧めです。元来、SEMAR PEGULINGAN という編成は、王宮でムードミュージックを演奏するのに使用されていた、という事もあってか、GONG KEBYAR と比較すると随分と甘い音色をしています。TABUH SEMAR PEGULINGAN という文字のあるカセットを見つけたら、要チェックです。TABUH とは、演奏曲という意味です。因みに、曲名に TARI とあったら、それは踊りのバックミュージックという事。しかし、必ずこの表記があるとは限りませんので、こ

れは余り頼りにしないで下さい。

UBUD 近辺の SEMAR PEGULINGAN で有名なグループの一つに、GUNUNG JATI があります。定期公演を行っていないので、一般の観光客が見る機会は少ないのですが、ガムランの音色が枯れていて、なんともいい雰囲気です。ゆっくり酒を飲むには最適であるという個人的な趣味で、このグループの演奏曲を多く収録したカセットをお勧めします。しかし、私もこのグループのカセットを5本程購入しましたが、どれ一本として、カバーにグループの名前が書いてありませんでした。では、どこで見分けたらいいのか、というと、どこの村のグループであるか、という表示で認識する訳です。バリでは、基本的には村単位にグループがあるので、村の名前がそのままグループを代表する事が多いようです。具体的には、GUNUNG JATI は TEGES のグループですから、BR TEGES PELIATAN の表示があれば、GUNUNG JATI であると思って間違いのない訳です。

●その4 【バリの雅楽・ルランバタン】

お寺のお祭りの際、舞踊が奉納される前に、ゆるやかな速さで、延々と厳粛な雰囲気で行奏をしているのをみかけますが、これは、LELAMBATAN という形式の演奏で、この形式の曲のみを収録したカセットも多く発売されており、一本は欲しいところです。本来は、GONG GEDE、直訳すると、大ガムラン、という編成で演奏するのが本式なのですが、何故かこの表示をカバーで見たことは一度もありません。ま、GONG KEBYAR で演奏しても、曲の形式が LELAMBATAN なら問題ない訳ですが、編成はどうあれ、出来れば、どっしりと落ちついた、格調高い演奏を聴きたいものです。選び方としては、カバーに、LELAMBATAN KUNO という表記があるもの。KUNO とは、古典という意味で、この表示があるカセットは、ほぼ間違いなく重厚な音を出しています。先ず最初にトロンポンが、トロン、ポーンと独奏を行い、少ししてスリン(笛)とルババがメロディーを追いかけて、クンダン(太鼓)が、ドゥワカバドデカパと入ってきて、全楽器が一斉に、ジャーンと一発だけ鳴らす。ここまでの所要時間は約一分。この段階で、お香の匂いを感じたら即、買いです。

●その5 【グンデル・ワヤン】

影絵芝居用のガムラン、GENDER WAYAN(GENDER)も、要チェック。何せ音の響きが繊細なので、出来るだけ録音状態の良いものを選んで下さい。音楽と一緒に、芝居の語りも入っているものもありますが、こっちの方は

語りが中心なので、余りお勧め出来ません。どうせ、何言っているのかなんてわかりやしないんだから。

●その6 【ヘッド・バンカーご用達！バラガンジュール】

パレード用のガムラン、BALAGANJUR も悪くありません。火葬の行列で見た事のある人も多いと思います。チェンチェン・コピャックという肉厚のシンバルをジャカジャカ鳴らす、やたら騒々しいあれですが、ハマるとけっこういけます。選び方はいたって簡単。

「は、はやいー、は、はげしー、か、かっちょいー！」

こう思ったら、OKです。これに関しては、微妙な味がどうのこうのなんて面倒くさい事言っていないで、ヘビメタの乗りで聴いて下さい。頭を振りながら聴いても気持ちいいでしょう。私はやった事はありませんが。

●その7 【ジェゴグ】

竹の巨大ガムラン、JEGOG も、是非欲しいところで。竹という、比較的柔らかい音を出す素材を使用しているにもかかわらず、連続する重低音がかなり暴力的な気分をそそってくれて、破壊力満点です。とにかく、重低音が綺麗に録音されているものを選んで下さい。3分程聴いて、血がざわざわ沸き立って来たら、迷わず買いです。これも頭が振れそうです。

●その8 【バリのサロン音楽・リンディック】

同じ竹のガムランでも、もっと親しみ易いのが、RINDIK です。同名の二台の竹製の打楽器と、スリン（笛）が中心の、レストランなどでよく見かけるあれです。これも一本買っておくといいでしょう。聴くに際して、特に気負いみたいなものを必要としないので、日常聴ける生活音楽として、日本に帰ってから重宝します。日本ではビクターとキングから、かなりの数のガムランのCDが発売されていますが、余りに庶民的で学者さんの研究対象から外れているのか、何故かRINDIKはCD化されていません。あんなに気持ちがいいのにね。

●その9 【聴く覚醒剤・ドゥグン】

厳密に言えばバリのガムランではないのですが、すっかりUBUDの音として定着しているのが、ジャワのDEGUNGです。欧米人の多いレストランで良くかかっている、ちょっとリズムがテクノっぽくて、スリン（笛）とサロン（金属製打楽器）のメロディーが異

常にわかりやすいわりには、みんな同じ曲に聞こえてしまう、あれです。一本くらいあってもいいかもしれませんが。これについては、はっきりと指定できます。SABILULUNGAN。演奏は、UJANG SURYANA。何かをしよう、という気を一切取り除き、人を駄目にしてしまう音です。最近では、DEGUNG様式を取り入れたシンセサイザーの演奏中心のカセットも人気があるみたいですが、やっぱり、どこを切っても同じ音の、金太郎飴のようなSABILULUNGANが基本ですよ、基本。

以上、思いつくままに挙げてみましたが、少しは参考になりましたでしょうか？

え、なに？種類が多すぎる？これさえ聴けば、他は一切必要がないと言う程、バリの芸能の神髄を全て完璧に網羅している一本が欲しいですって？

そんなのありません。

さあ、様々な苦難を乗り越えて、ようやくお気に入りのカセットを手に入れ、ご満悦のご様子。でも、安心するのはちと早い。バリのカセットはすぐに『ワカメ状態』になります。ウニョウニョビロヘンに腹をたて、せっかくの思い出をゴミ箱にたたき込むような悲劇が起こる前に、コピーをとっておきましょう。又、ラベルが貼っていないのが普通なので、買ったらすぐにインデックスラベルを貼りましょう。さもないと、どれがどのテープやら、皆目見当がつかなくなってしまいます。ついでに、誤録音防止のツメも折っておきましょう。

では、ビールとガラムを用意して、リスニングルームにこもり、左右のスピーカーから押し寄せる音の波にさらわれて下さい。



Illust:Fumio

バリ島楽園紀行

飯嶋 けい子

「こういう本欲しかったのよ」

そんな声があちこちから聞こえてきそうな本が刊行されました。「バリ島楽園紀行」。伊藤博史さんと佐藤由美さんが原稿を担当し、新潮社から3月25日全国一斉発売となりました。

普通のガイドブックとは違い、信仰に基づいて発展してきたバリの文化を中心として、美しいカラー写真を多用して紹介しています。バリ人にとってすべての源となる寺院と信仰、バリを華やかに彩る美術、伝統と華麗さを併せ持つ数々の芸能、一度は訪れてみたいとおきの名所案内、その他コラムではバリの本当の姿を知るための情報がたくさん盛り込まれています。

写真はすべて渡部 赫さんの撮影。バリに十数回通い、バリ人より島内の道を知っているかもしれない彼が、幾多の困難(?)を乗り越えて撮り続けた素晴らしいものばかり。ページをめくると洪水のように飛び込んでくる、バリの美しい様々な姿。迫力ある踊り子の写真は瞬間の美を本の中に封じ込めてしまったようで、今にもガムランの音が鳴り響いて踊りだしそうです。オダランの光景や色とりどりの供物をとらえたカットは、まばゆいほどに色が氾濫し、鮮やかなバリの姿を見事に表現しています。短い滞在ではなかなか見ることの出来ない景色を本の中に見るのもよし、一度見て目に焼きついているあの情景に思いを馳せながら写真を見つめるのもよし。時間の経つのも忘れ、至福の一時を過ごすことが出来るでしょう。

また伊藤さん由美さんを主筆に書かれた文章は、バリに永く住み、バリを愛している人だからこそ書ける、とてもわかり易くまた役に立つものばかりです。この本1冊あれば、まあ旅の恥はかき捨て、ということはないでしょう。特にお役立ちなのはグループが紹介と公演スケジュール。ウブド周辺で定期公演を行っているすべてのグループが紹介され、公演の時間と場所が載っています。スケジュール表を見れば、今日はどこで何をやっているのかが一目瞭然、地図も付いていてとっても便利。本は部屋でじっくり読むとして、私はこのページだけコピーをとって持ち歩きました。他にも役立つ情報がいっぱい!このコーナーだけではとても紹介しきれません。ぜひ読んでみて!

最後の章「楽園つれづれ草」の伊藤さんと由美さんの文章は、二人のバリに対する想いがそれぞれ綴られており、これが好対象を示していて実に興味深かったです。ツーリストに徹しようという伊藤さんと、バリ人になりたいという由美さん。どちらの話しもバリに対する深い愛情に溢れていて、思わずほろりとしてしまうような文章です。

これまでのガイドブックではあまり紹介されなかった、信仰に基づいたバリ人の心の在り方を少しでも理解することができれば、バリ人との心の触れ合いや新たな感動があるはずです。次のバリ滞在の折にはぜひ持って行ってほしい一冊だと思います。

とんぼの本シリーズ

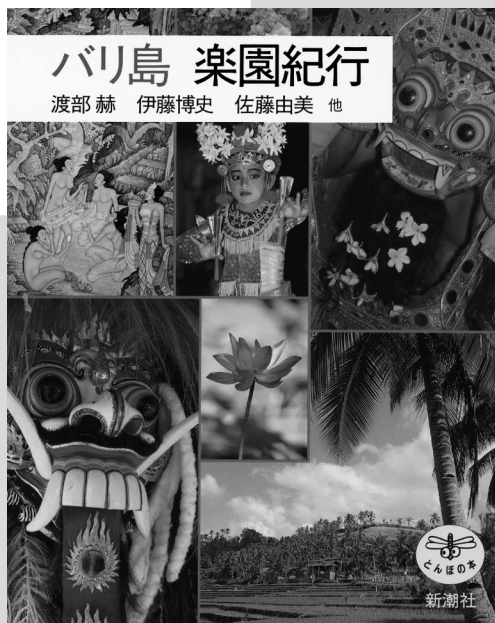
「バリ島 楽園紀行」

著者：渡部赫 伊藤博史 佐藤由美 他

発行所：(株) 新潮社

定価：1500 円

全国の大手書店および影武者にて好評発売中…!



DARI JEPANG

バダ

ご無沙汰です。

いかがお過ごしでしょうか？僕は相変らずばたばたしています。寒い寒い冬は辛いです。早く暖かいインドネシアに行きたいが、そうもいかないのがもっとも辛いです。助けてください！HELP!

インドネシアも洪水と地震で大変だろう、自然が本当に怒っているような気がする。バリはいかがですか？何ヶ月も行っていないので大分変わったことでしょう。UBUD もそろそろのんびりできなくなってくるね。

僕は今やっと自分の事務所と教室を開けました。忙しくはないがこちらの方が、ゆっくりで楽しくやれる。今のところはまだ宣伝もなにもしてないですが、結構仕事は増えています。僕が思っているよりインドネシアに対して興味を持っている日本人が多いようです。

教室はインドネシア語だけではなく、月に一度インドネシアの料理も習って、あとは翻訳もやっています。今は日本の昔話を翻訳しています。これをいずれインドネシアで出版したいと思っています。日本の昔話とインドネシアの昔話は似ているのが多いけど、インドネシアでは知られていない。今はまだ読む人がいなくても、いずれ僕の子供や孫が読んだら日本にもインドネシアのように、昔話があるんだな…と知ってほ

しい。

とりあえず Bahasa・Rasa・Seni（言葉・味・芸術）でインドネシアを知るという教室で「BUDAYA」と名付けてます。

Budaya は、インドネシア語で文化の意味を表します。

日本とインドネシアの交流は昔からありました。個人交流から経済交流や文化交流まで行われて、また両国もお互いに影響を受けました。その中でも一番多いのは経済交流で、一番少ないのが文化交流です。また個人で旅行を通じて両国に訪問する人も多い。更にもっとも理解を深めるために、現在では両国でお互いの言葉を勉強する人が増えました。特に僕の住んでいる大阪では、つい最近までは、インドネシアはどこにあるか知らない人も多いような気がしましたが、いつの間にか、インドネシア語の学校が信じられないぐらいの数に増えました。各企業でインドネシア語の教室を開くところも少なくありません。大企業や貿易関係の人がインドネシア語を勉強する。これが今のインドネシア語学校の実体です。仕事以外で個人で本当に勉強したい人も、そんな環境で勉強しなければなりません。



Illust:Fumio

ここに巡り着いた
今ここで
同じ道に旅する友と出会えた
今まで一人でいろんな道を歩んだ友
まるで 自分のような友
明日の旅には
限りなく広い砂漠の道
手を切る岩山がある
酒を片手に二人で乗り越える約束
明日の道には 握る手がある
明日の旅には 歌がある
そして いつかその道にも
小さな小さな足跡が
明日の喜びに乾杯

残念な結果です。じゃ本当に興味を持ってインドネシア語や文化を学びたい人はどうしたらよいのか？どこへ行けば出来るのか？そのような疑問を持っている方のために、この「BUDAYA」は作られました。

Budaya で何を？

Budaya ではインドネシア語だけではなく、その名の通り、インドネシアの文化を知るために、芸術や料理も勉強します。文化交流をもとに、インドネシアと日本とのコミュニケーションの場として情報の交換や話を聞くことができます。また Budaya では、今までのように先生と生徒の壁を取り除き、人間として楽しい交流を行うことを目的としています。

BUDAYA

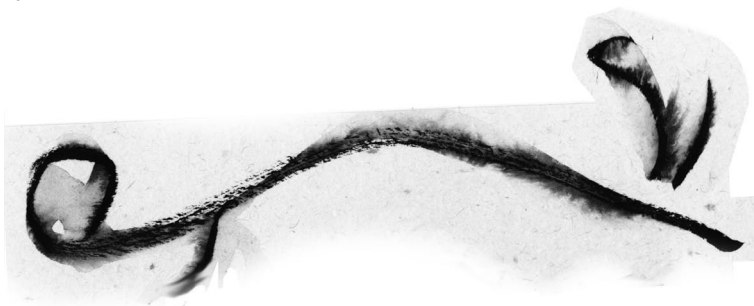
大阪市中央区徳井町 2-1-15 共栄ビル 3F

Tel/Fax: 06-941-0464

◆極通本部スタッフより◆

ここ UBUD で、ひょんなことから知り合いになった、ランギン・スンバダ氏。ジャワ島出身ですが、お父様のお仕事の関係で日本に住んで、もう十数年になる、バリバリのナイスガイです。来日したばかりの頃の苦労話を、今はおもしろおかしく語ってくれるバダ氏ですが、彼なりにいろいろ苦労もしてきたに違いありません。ひとりのインドネシア人として見てきた日本と、そして少し離れて見た自分の国インドネシア。彼が今、開こうとしている教室「Budaya」では、興味ある話がたくさん聞けることでしょう。

これからのバダ氏のご活躍を願って、ここに、彼の作ったひとつの詩も、ご紹介しちゃいましょう。



「道」

母よ！

覚えてるか？

夜 泣く俺を怒ることなく

よしよしや お母ちゃんはどこにいるよ

母よ！

時は流れ 旅を重ね

我こここで

この先は我一人で行く

いつも抜ける日もなく 温かい味噌汁を

ありがとう

父よ！

肩は凝らないか？

二人で釣りに行った時が懐かしいな

確かこう言ったね

息子よ！

俺が与えた魚は明日には保たない

今日はお前に釣りを教える

好きな魚を自分で釣るのはお前の道

受けて立つのは旅の運命（さだめ）

父よ！

俺を背負った肩をありがとう

この先は我が足で歩く

我も長い長い続く道を歩んで

時には笑い 時には涙

一步一步 また一步一步

Toko ◇ BEST 店

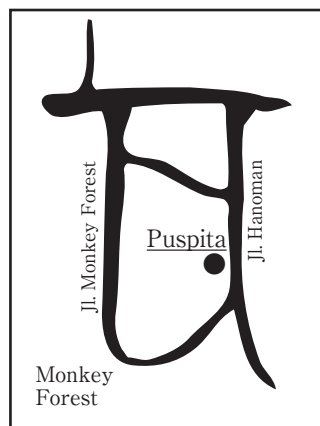
Puspita

手作りテラコッタが貼り付けられている壁が印象的なブティック“Puspita”（インドネシア語で花という意味）がHanoman 通りに OPEN しました。

お店の中をのぞいてみると、お花畑を連想させるような色とりどりのイカットで作られた服や、それとは対照的に白、黒といったシックでどこことなくチャイニーズの香りがする服（実はコレ、バリの正装した男性が必ず着けているサブツの布で作ったそうです）もあります。デザインパターンからおこしたオリジナルのウェアだけでなく、ボタンもココナツや貝などから作るオリジナル品を使用しているそうです。

「デザインはとてもシンプルですが、動くたびに微妙に色が違って見えるイカット、バリ人がハレの日に着用する布など、素材にこだわりました。バリのハデハデ柄、ブカブカサイズの服にガッカリされている方は、ぜひ一度のぞいてください。」とオーナー。

ウェア以外にも今後、オリジナルのアクセサリーや雑貨などもお目見えするそうです。



Jl.Hanoman No.53 Ubud Gianyar Bali Indonesia

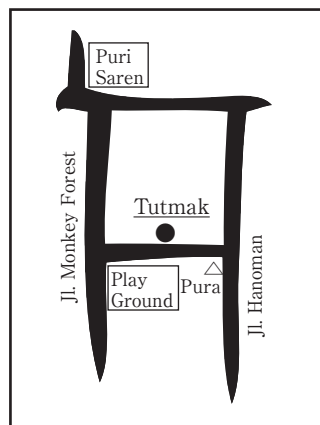
Warung ◇ 味な店

Tutmak

Jl. モンキーフォレストのサッカーグラウンドからバダテンタルのケチャの会場に抜ける道の途中にある Tutmak。栄養もボリュームもたっぷりの、ウエスタン・ホーム・クッキングをたべさせてくれるレストランです。

B.G.M. やインテリアがとてもさりげなく、おしゃれな無国籍風で、インターナショナルな雰囲気です。黒板に書かれた料理のメニューは、毎日のように変わりますが、中でもおすすめは、ホームメイドのスープ、サラダ、サンドイッチ、そしてメインディッシュ。極通スタッフの取材では、

- おまけについてくるパンと本物のバターがウレシイ。
- B.L.T. サンドのベーコンのカリカリ具合と、添えてあるたっぷりのフライドポテトのおいしさは UBUD いちばん！
- サラダに入っている野菜＜サニーレタス・ピーマン・紫キャベツ＞、そしてカッテージ・チーズ入りのドレッシングは拍手もの！
- メインディッシュやパスタは、他のレストランにはないオリジナル。…などなど、なかなか感動でした。こんなおいしいヨーロッパの本格的家庭料理が UBUD でも食べられるようになったのですね。コーヒー＆紅茶、デザートもバラエティ豊かだし、とにかく節約滞在で日頃食生活が貧しい方、一度、栄養をつけに行ってみてください。ヘルシーでボリュームたっぷり、お腹いっぱいで大満足保証付です。



Jl.Dewi Sita Ubud 80571 Bali TELP:(0361)975754

私の常宿

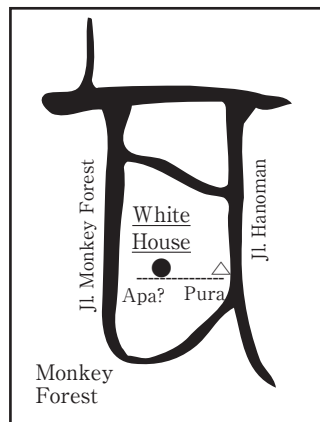
Pondok Manis

ホワイト・ハウス

ポホン・クパラ

「ティンガル ディ マナ（どこに泊まってるの？）」市場やワルン、時には道端で少し親しく話始めると、決まって尋ねられるのがこの質問。「バダン・テウガルだよ」と、まずは地名で応えると、たたみかけるようにして「バダン・テウガルのどこ？」とくる。特に他意はないのだろうが、人の足元をみるつもりなのかナ…とも勘繰ってしまう。いっそ「アマンガリに決まってるじゃん。」なんて言っただけで驚かしてやろうかと思う時もあるけれど、どうにもこの身なりでは…。で、正直に「ホワイト・ハウス」と自状するとたいがい人は、そんな聞いたことがないよ、といった表情を浮かべている。なかには「それじゃあ、あんたはビル・クリントンだね」と、ほんのちよびり気の利いた半量を入れてくるものもいるけど、まずはほとんど誰も知らない。それもそのはず、ここには看板もないし、メインストリートから奥まった田んぼの中に、ボツンと2棟建っているだけ。

ここに住み続けて1年。いまはさしたる不自由も感じないが、初めの頃はやはりいろいろ苦労させられた。例えば道。Jl.Monkey Forestからは約100mの“険しい”畦道をとことこ歩いてくる…田んぼに墜落すること5回！Jl.Hanomanからは直線距離にすれば、ほぼ150mくらいか。近所の犬に吠えまわられながら路地を抜けると、小さな溪谷に出る。99段ある石段を、降りて上ってハハハ息を切らしながら部屋にたどりつくという“毎日がトレッキング”状態。まあ、体力だけはついたような気もするが。最近は、長期の滞在者が多く利用するようになり、気が合えばお互いに部屋を訪ねたり、時には手作りの料理で小さなパーティーを開いたり、他のバンガローではなかなかお目にかかれない光景が見られる。“住めば都”とはいいますが、この頃では“住めば長屋化”のきらいがないでもない。



●インフォメーション：8部屋、テラス付き。
ホットシャワー、朝食付き一人Rp25000～

ADDRESS: Hanoman Padang Tegal, UBUD
Phone: (0361) 974855

旅人一声 Pesan & Kesan

ちなえ

お日様がまぶしい。色鮮やかな世界が目の前に広がる。意識がもうろうとして、時々夢か現実か分らなくなる。手をかざして「あー、ここに居るんだ」と思わずにんまりとし、嬉しくて何かを抱きしめたいくなる。初めてのバリ。真夜中にクタに着いて、翌日タクシーの中で私は少し後悔していた。クタではろくに道を歩くこともできず、銀細工の村ではわけのわからぬまぼられ、頼れる人が誰もいないことを不安に感じた。

ウブドに入り、バンガローの窓から景色を眺めほっとしたのがウブドの最初の印象だ。それでも2、3日は大変で、右も左も分らず道を歩けばひっきりなしに声がかかり、ちょっと立ち止って男の人と話をすれば誘いがかかる（この展開の早さにはついていけない…）。二日目昼夜問わず向かいの部屋から妖しげな声がもれてくる。独身でセクシーな宿の管理人さんから部屋でビールを飲もうと誘われた時、停電で薄暗い部屋の中で私は一人無事貞操を守りぬいて日本に帰る事を心に誓った。

それから居酒屋「影武者」で伊藤さん、大原さんをはじめいろんな人と知り合って思いもよらなかった体験をいっぱいする事ができた。そして、少しづつ町（村？）の外れのほうへと足を向けだした。お供え物を頭にのせた女性達の親しげな笑顔。どこからともなく聞こえてくる心地好いガムランの音色。のんびりとおだやかに時間が流れ、ふとしたきっかけで溜め息のもれていない自分に気がつく。

そして私は心からバリに来て良かった…と思った。

■「バリ島楽園紀行」出版記念パーティー報告！

少し内輪の話になってしまいますが、BUKU紹介でもご覧の通り、この度、極通の本部スタッフは、とんぼの本「バリ島楽園紀行」の作成に参加し、皆様のご協力を得て、3月25日に無事出版することができました。この誌面を借りて、皆様に心から感謝の意を述べさせていただきます。特に以前から精神的、そして具体的(?)なささえとなってくれた、ほりり&えりりさんを始め、大勢の友人達はこの本を捧げたいと思います。ありがとうございます。

さて、その出版を記念して去る4月7日、このUBUDで本の主筆、編集、写真すべてを担当した渡部赫氏を中心となってパーティーが行われました。場所はCafe EXILES。踊り手もバリの友人達を中心に、和気藹々と盛り上がりました。本のイラストを担当した、おなじみ深谷陽氏、大原正博氏、そして本文の執筆に参加した嶋けいこ女史を始め、たくさんの友人達が集まり、UBUDならではの出版記念パーティーになりました。Terimakasih Banyak

■竹ちゃん結婚にゴールイン！

「バリ人の宗教について(影の出版会：出版)」の著者、吉田竹也氏は、1996年4月12日ジャカルタ市内にある役所にて、海を隔て3年来の交際であったインドネシア人の恋人ロッキーさん(20才)とイスラム教の婚姻の儀式を終え、この度めでたく結婚



にゴールインしました。吉田氏はすでにイスラム教に改宗しており、この日の新郎新婦の出で立ちもイスラムの正装でした。新婦のお母さんと親類縁者、そして新郎側の立ち会い人として「影武者の伊藤氏」が見守る中、ハジ(メッカに巡礼した人)の前で誓詞を読み上げ、署名捺印のあと、指輪の交換、そして新郎から新婦へネックレスのプレゼントをしました。この日に至るまでにはいろいろと困難があったようですが、とどこおりなく式も終り、新郎新婦の顔に幸せと安堵をかみしめる笑顔があふれていました。新居は四日市の新郎の実家。慣れない異国の地ではありますがロッキーの若さで乗り切ってほしいと思います。お二人の末永いお幸せと吉田氏の今後のご活躍を心から祈っています。

■EKA BHUWANA

前号でちらりとお知らせしたブラ・ブサキのウパチャラ、エカ・ブワナ。儀式は1996年1月6日から5月1日の約4ヶ月という長い期間をかけて行われました。一説によれば、このエカ・ブワナのウパチャラは、1979年3月に100年に一度の大祭「EKA DASA RUDRA(バリ語読みだと、エカ・ダソ・ルードロ)」の一環として行われた最終儀礼だということです。「EKA DASA RUDRA」は、直訳すると「十一方位の大祭」。東西南北とそれぞれの中間、上下、そして中心の十一方位。つまりこの地上全体、天上、下界、すべての世界を清め、平和と安全を祈る儀式ということになりますが、1979年に行われてから、次のようなウパチャラがその一環として続いてきました。「EKA DASI」／満月と新月の間の11日間の儀礼。「PANCA WALIKRAMA」／五方位の儀礼。「TRI BHUWANA」／三つの世界の儀礼。そして最後の締めくくりとして、今回の「EKA BHUWANA」があったわけですね。2月14日から、火葬式は、このブサキのウパチャラをけがさないようにと、一切禁止され、その三ヶ月間に亡くなった人々は日没後、仮の埋葬をされるだけにとどまりました。そして3月20日、ニュビの前日でもあったこの日から、バリ島内外からの一般の人々のムスボ(お祈り)が許され、特に3月27日には、ブサキの中にあるすべてのブラをあげてのメインセレモニーでもある「PANIHAS MEHYU」という儀式が行われました。一般のムスボの最終後4月26日まで、バリ島内外から訪れた参拝の人々で、ブサキ

は大混雑。オダランの時、ブラで夜を明かすことを「ムコミツ」といいますが、毎夜毎夜、あの広いブサキの敷地がムコミツの人々でいっぱいだったということです。

この期間に普通の観光のつもりでブサキに訪れたツーリストは、大渋滞で大変だったようです。バリに長期滞在している大勢の外国人も、ちゃんと正装してムスポに参列する姿が見られたと、バリの人々も喜んでいました。

この世のすべてのもの“森羅万象”の平和と調和を祈る「EKA BHUWANA」の儀礼。このバリからの人々の尊い祈りが、少しでも全世界に伝わりますように。…と、ついにムスポに行けなかった極通スタッフのひとり、心から思ったのです。

■手作り石けん完成！

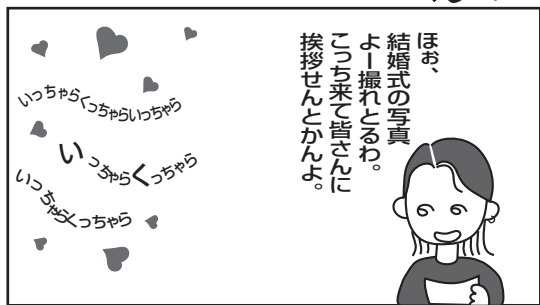
“UBUD の環境を考える”のコーナーで何度も取り上げてきた洗剤の問題。下水、排水の不備を嘆く前に、合成洗剤を使わない事が先決ではないかと考えていたところ、UBUD に住む日本人女性が手作りの無添加石けんに取り組み、この程完成したと聞き、さっそく購入しました。環境にやさしく、そして、使ってみて嫌な匂いやヒリヒリ感がまったくない肌にもやさしく、泡切れもよい石けんでした。石けん一つでUBUD の環境悪化が少しでも少なくなればと思います。今後、粉石けんができれば、洗濯もらくになっていいなと考えています。前述の石けんは、インフォメーション APA? や GANESHA BOOK SHOP で Rp2500 で販売しています。ぜひお試しください。

■近況速報

★PESTA Kesenian Bali が (バリ・アート・フェスティバル) はじまりました。オープニング・パレードは6月8日。今年のパレードのテーマはチャロラン。いろいろな種類のバリオン & ランダが、各県ごとに登場。中でもジュンブラナ県代表のグループのワリスを持った踊り手が、白昼堂々とトランスしてしまい、(大臣や州知事の前で)生中継のT.Vを観ていたバリ人もびっくり。さすがバリ……。

■スペースがなくなっちゃったけど
★グメン

うぶな人々 その14 えりり



【年間購読申込み方法】

エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おおかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

Studio

Name	Point	Address / Tel.	
Semara Ratih	あのスマララティのリーダー、アノムそしてアユがコーチしてくれる。宿泊施設有り。	Jl. Kajeng 25, Ubud Tel. 96277	ダンス ミュージック
Puri Agung	プリアタンの王宮でも習えるのだ! 宿泊施設有り。	Peliatan	ダンス ミュージック
Mandara	御存知、ティルタサリのご本家。宿泊施設有り。	Peliatan	ダンス ミュージック
Gunung Merta	日本語のできるパノイタバグース氏が相談にものってくれる。宿泊施設有り。	Andon Tel. 975463	ダンス ミュージック
Nata Raja	STSI芸術大学出身のワヤン氏は、マルチティーチャー。	Jl. Sugriwa No.20, Ubud	ダンス ミュージック
Wayan Karta	ガイドのカクタ氏の家族はダンサー、ミュージシャンが粒ぞろい!特にグンマニちゃんは男性ファンのマドンナです。教え方も上手。	Jl. Suweta, No.16, Ubud	ダンス ミュージック
Sanggar Centil Cili	STSI出身のメンバーを中心に、スタッフもやる気満々。気軽に習えます。	Pengosekan, Ubud	ダンス ワヤンクリッ
Dewa Berata	あのスマララティのクンダン(名物男)奏者。STSI出身。お父さんから、4人の兄弟みんな音楽一家。	Pengosekan, Ubud	ミュージック
Gusti Sana	Sana氏独特のカエル百態、ちょっとエッチなタッチ。とてもやさしい先生。	Pengosekan, Ubud	ペインティング
Budiana	D. ボウイも持っている、ブディアナ先生の摩訶不思議なエロティックなスゴイ絵あなたも描けます。	Jl. Hanoman	ペインティング
Lantir	テガスのグヌンジャティの巨匠、パノランティール氏が秘伝の技を伝えます。	Br. Tegas Kanginan No.53	ミュージック
Rino	一度観たら忘れられないあのTegasのケチャのワイルドマン!ノさんが教えてくれます。トベン、バリス、Bagusです。	Br. Tegas Kanginan No.50	ダンス
Komang Bintang Sarini	ブムサレンの花形ダンサーのひとり。とてもいいねいに教えてくれる。練習場完備。	Jl. Setra 6 Tel. 974645	ダンス
Mugni & Tutuni	上のコマンビンタンさんの妹、マグニとトゥトゥニ。ブムサレンの若手スター、とっても美人。	Jl. Suweta 7	ダンス
Puri Saren	Ubudの王宮に泊まって踊りを習っちゃおう!先生いろいろ紹介してくれます。毎晩敷地内でダンスも観れちゃう。宿泊施設とってもバグース。	Puri Saren, Ubud	ダンス

アムゴンバン

Pengumuman

■ Soft!

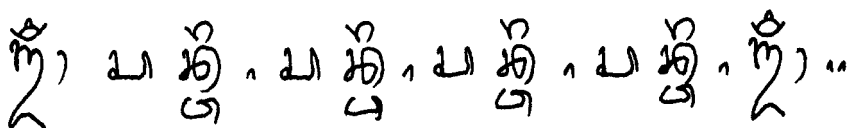
バリのダイビングカンパニーの中でも人気の高いバリ・インターナショナル・ダイビング・サービス (B.I.D.S.)。そこで長年インストラクターをつとめる、プロ中のプロ、YOSHI さんからの伝言で〜す。

「古い、古〜い、コンピュータを購入しました。機種は、Macintosh Color Classic M1600 です。もし不要になったソフトがありましたら、お譲りください。」

連絡先: B.I.D.S. Office / Telp:751342

自宅 (在宅時間: 夜 11:00 ~ 朝 7:00) / Telp:758640

もしくは「居酒屋・影武者」まで。





Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / えりり / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーイラスト：深谷 陽

極楽通信「UBUD」Vol. 14

1996年6月15日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha
Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1996 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 ikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803